琳派展XIV

生誕250年記念展

酒井抱一と江戸琳派の全貌

平成24年4月10日(火)～5月13日(日)

※作品保護のため、展示替を行います。詳しくはホームページをご覧下さい。

休館日/4月16日、23日、5月1日(4月30日、5月7日は開館)

開館時間/午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)

入館料/一般1,000円(800円) 学生800円(600円) ※( )内は20名以上の団体料金

会場/細見美術館 京都市左京区岡崎最勝寺町6-3 http://www.emuseum.or.jp

お問合せ先/岡野智子(学芸担当) 三宅由紀(広報担当) TEL/ 075-752-5555 FAX/ 075-752-5955 E-MAIL/ kouhou@emuseum.or.jp

HOSOMI MUSEUM

開催趣旨 ≫≫

酒井抱一(1761-1828)は、宗達、光琳らが京都で築いた琳派様式を、江戸で再興した画家として知られています。その画風は伝統的な琳派を強く意識しながら、江戸後期らしい新たな好みや洗練度を加えたもので、近年は抱一の確立した新様式を「江戸琳派」と称しています。

江戸琳派は、単なる琳派様式の継承にとどまらない幅の広さを持っています。風俗画や仏画、吉祥画や俳画などさまざまな主題や作風を手掛け、そこには抱一が親交を結んだ各方面の文化人も深く関わっています。また、抱一の没後も江戸琳派は実に一世紀以上にわたる命脈を保ち、特に高弟の鈴木其一(1796-1858)や池田孤邨(1801-1866)ら、幕末期の画家の活躍は、昨今大きな注目を浴びつつあります。

本展は、抱一が平成23年(2011)年に生誕250周年を迎えたことを記念して企画されたものです。抱一の地元である姫路市立美術館、抱一研究の活路を開いた小林忠館長率いる千葉市美術館、抱一及び江戸琳派のコレクションで随一の細見美術館の三館が研究・企画協力し、抱一と江戸琳派の全貌に迫る巡回展で、当細見美術館が最終会場となります。

近年相次いで開催された大規模な琳派展の中でも酒井抱一は大きく取り上げられていますが、本展は正に酒井抱一と江戸琳派を中心に扱う展覧会であり、「琳派」の文脈だけでは語りきれないその幅の広さも展示の特徴です。姫路、千葉両会場ともに大変ご好評をいただきましたが、当館にのみ出陳の作品もあり、記念展にふさわしい充実した展覧と研究の成果を是非ご高覧下さい。

細見美術館

展示構成 ≫

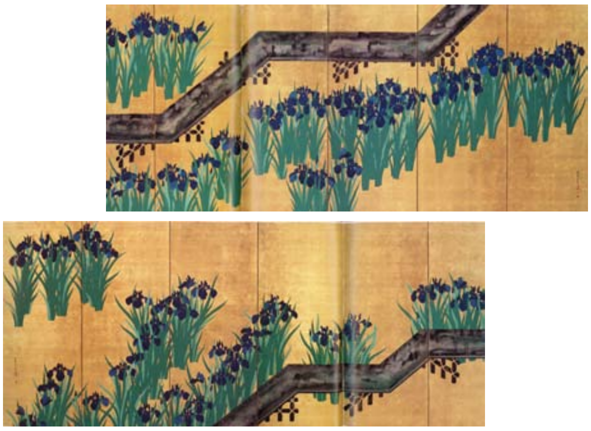
浮世絵制作と狂歌

江戸の酒井家藩邸で生まれ育った酒井抱一（1761-1828）は、天明期の江戸ののびやかな気運の中で青年期を過ごした。浮世絵師歌川豊春に倣う肉筆浮世絵を描く一方、天明狂歌壇にも積極的に関わるなど、大名家の二男としては破天荒な暮らしぶりだったが、兄宗雅はこれを温かく見守った。

酒井抱一筆 松風村雨図【細見美術館蔵】

琳派画風への傾倒

抱一は37歳で出家する前後から、尾形光琳の画風に強く傾倒する。文化12年（1815）、55歳の時には江戸で光琳百回忌の法要や展覧を行い、また京都の光琳の墓を整備するなど、光琳の後継者として自他ともに認める存在となる。版本『光琳百図』の編纂などを通して光琳画を学ぶ機会を得、明快な光琳様式を次々と手掛けた。



酒井抱一筆 八橋図屏風【出光美術館蔵】

江戸文化の中の抱一

抱一は琳派風の絵画や意匠ばかりを描いていたわけではない。若い頃から吉原に通った抱一は、大文字楼の遊女を請け出し内妻とする。吉原に因む洒脱な作品は、抱一が吉原を愛した証しである。

また多くの文化人との交流も、彼の作風に豊かな色を添えている。江戸における王朝好みの風潮を反映した作品など、多様な画題や筆致に抱一の画業の広がりをみる。

酒井抱一筆 紅梅図【細見美術館蔵】

展示構成 ≫

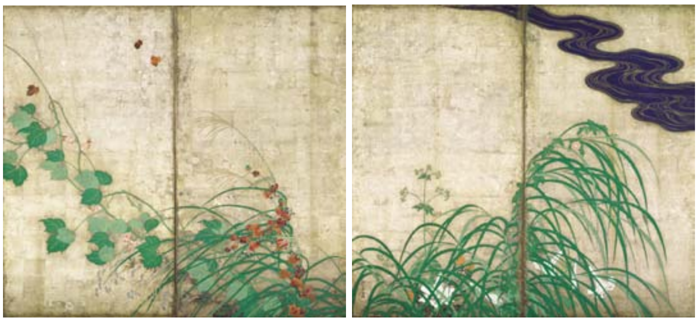
雨華庵抱一の仏画制作

大名家の一員という高位の身分を捨て、出家して市井の画家として後半生を歩んだ抱一。その重要な仕事のひとつに仏画制作があった。その多くが高価な絵の具を駆使したもので、いずれも特別な注文であったことが窺われる。抱一の大塚の寓居雨華庵は、画室であるとともに仏事を営む場でもあった。

酒井抱一筆　青面金剛図【細見美術館蔵】

江戸琳派の確立

60歳前後から、抱一はより洗練された花鳥画風を描くようになり、重要文化財「夏秋草図屏風」に代表される抱一独自の様式が誕生する。四季の移ろいを的確に描き、自然の風趣を捉えた新たな作風は、従来の琳派様式と一線を画し、後に「江戸琳派」と呼ばれる。最晩年に至り、繊細にして優美な江戸琳派様式が確立されたのである。



酒井抱一筆　◎夏秋草図屏風【東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives Source:http://TnmArchives.jp/】

◎：重要文化財

工芸意匠の展開

琳派の画家の多くがそうであるよう、抱一もまた多様な工芸意匠を手掛けている。中でも蒔絵師　原羊遊斎との共作となる蒔絵制作は、江戸琳派デザインのブランド化であり、大名や豪商の注文による豪華な蒔絵の調度もあれば、櫛など手軽な装身具も少なくない。また団扇や扇などにも優品が多く、需要の多さを物語っている。

酒井抱一下絵　原羊遊斎作
蔓梅擬目白蒔絵軸盆【東京都江戸東京博物館蔵】

展示構成 ≫

鈴木其一とその周辺

抱一の後継者として頭角を現したのが、鈴木其一（1796-1858）である。姫路藩士として抱一を補佐しながら、次第に斬新で明快な独自の画風を展開、多くの弟子も育てて江戸琳派様式の拡大に貢献した。

鈴木其一筆 夏秋渓流図屏風【根津美術館蔵】

江戸琳派の水脈

抱一によって江戸に定着した光琳様式は、洗練の度を加えて江戸琳派に発展した。十八世紀末を端緒として、抱一の没後も継承され、幕末から近代にかけても江戸の美意識を象徴する存在として百年以上の命脈を保っている。最後に江戸琳派の系譜を辿りつつ、象徴的な画風やユニークな画題を取り上げ、全貌を見渡す締めくくりとしたい。

池田孤邨筆 百合図屏風【遠山記念館蔵】